はじめは、僕たちの様な若い団体に何を言われても、父兄の方には届かないかも・・・なんて思いから、坂井先生のコラムをお願いしたのがキッカケでした。気付けば、もう９１回。約７年半、毎月超多忙な坂井先生にコラムを書き続けて頂きました。先日坂井先生から「もう充分、久田は伝える側の人間やで」と言われました（笑）
僕たちもこの７年半でそれなりに成長したと思います。確かに「伝える側の人間」になって行かないと。超多忙な坂井先生にこれ以上負担をかけ続けるのもいかがなものかと・・・そこで苦渋の決断をしました。
サンフェイスの利用者さんだけでなく、スタッフ、関係者にも大変好評だった坂井先生のコラムが、来年度から２ヶ月に１回の掲載に変わります。長期に渡り何も言わずに、コラムを書き続けてくれた坂井先生に心から感謝致します！！
もちろん無くなる訳ではありません（笑）少しゆっくりなペースになるだけです。今後とも宜しくお願いします！　　久田

第 91 回『わかるように伝えていますか』

香川大学　坂井　聡

中学部や高等部になると作業学習が始まります。作業学習は作業活動を学習活動の中心に据えている学習形態です。実際的な働く活動を通して、現実度の高い内容を学習することに意味があります。職業生活や家庭生活に必要な実践的な知識や技能、及び態度を身に付けることがその主たる目的だからです。

実践的な知識や技能、態度を身に付けるという意味では、働いたことを実感できるようにするためには、働いたことに対して報酬を得る体験をすることは欠かすことはできません。そこで、地域の事業所などと連携した作業学習やバザーなどと関連させた作業学習を展開することが必要となってきます。

しかし、そこで利益を出すことは学校教育では認められていないのが現状です。自閉症スペクトラムのある児童、生徒に実践的な力を付けてもらうためには、働いたことと報酬としてのお金について関連付けて指導していくことが最も効果的だと考えられるのですが、現実には難しいのです。働くということの理解を進めるうえで、今後解決していかなければならない課題だと言えます。

このような問題の解決するための一つの方法として家庭との連携が考えられます。学校での作業の後、トークン（代用貨幣）を渡し、家庭に持ち帰ってもらいます。家庭でもお手伝い等したときにトークンを渡してもらうようにします。家庭では、学校でもらったものと、お手伝いの結果もらったトークンがたまっていくことになります。そして、約束した枚数のトークンがたまったら、実際のお金と交換して買い物に行ってもらうようにするのです。このように家庭との連携をとり、トークンを活用する方法をとることで、学校で行う作業学習の限界を補うことができます。

学校や家庭で完結するような学習方法ではなく、卒業後の社会参加につながるような指導が求められているということを忘れてはならないと思います。

これまで、数年間にわたり毎月サント物語に連載させていただきました。原稿が遅い時にも、怒ることなく対応していただいた久田さんには感謝しております。次年度からはペースが少しゆっくりになります。二ヶ月に一回のペースになるようです。新しい情報も紹介できればと思います。とりあえず区切りということです。長い間ありがとうございました。

坂井聡先生の紹介

（プロフィール）
香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、 香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、 現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。 2013年より教授に就任。
（著書）
暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など